

光原百合「写想家」における「想い」の現実性

荒木, 正見
総合文化学会

<https://doi.org/10.15017/1954834>

出版情報 : 総合文化学論輯. 4, pp.31-38, 2016-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies

バージョン :

権利関係 :

光原百合「写想家」における「想い」の現実性

荒木 正見

小論は光原百合の短編集「扉守 潮ノ道の旅人」における一篇「写想家」を解説する試み的一端である。作品の解説として、作者の意向を最大限読み取ることを第一とすることは言うまでもないが、解説するものの視点から、作者にとっては無意識的かもしれないが、作者自身の表現の本質的意味において作品のテーマに欠くことのできない諸概念をも探求し、この作品の豊かさを示唆してみたい。

テキストは光原百合『扉守 潮ノ道の旅人』（文藝春秋、文春文庫、2012年）を用いる。

1. ストーリーと考察の要点

まずストーリーを追って考察する要点を指摘する。

主人公菊川薫は女性っぽい美貌の「フォトアーティスト」である。かといって「写真家」ではない。デジタルカメラを対象に向けシャッターを切るが、写し取るものは対象の「想い」である。それも菊川の意向によっては、本当に対象から抜き取ってしまう。抜き取られてしまうと、その程度によってはエネルギーを奪われ、その間の記憶を失ってしまう。

場面は、尾道市千光寺山山頂展望台を連想させる「白珠山頂上近くの展望塔」から始まる。

はじめのエピソードは新婚旅行の思い出を訪ねてきた老夫婦を撮影するもので、ここでは穏やかに、さも普通の写真家のように撮影して、画面には夫婦の映像ではなく、夫婦の雰囲気とでも言いたくなるような抽象的な映像が映し出される。

次に、絡んできた酔っぱらった若者のエピソードである。

若者はバイセクシャル的な菊川に言いがかりをつけ暴力を振るおうとする。すると菊川は、若者のいらだちの原因を、失恋に拠る八つ当たりと言い当てて、一瞬カメラを向ける。若者は突然意識を失い倒れてしまう。それは菊川が「手加減なしで」（178頁）撮影したからだという。しかも、いずれも抽象的な光と影の映像だが、老夫婦の写真は「いいのが撮れた」（178頁）が、酔っぱらいの若者のものは「何の方向性もなくぐちゃぐちゃ」（178頁）というわけでデジタルカメラから消去される。

ここで、展望塔から降りて去ろうとする菊川とすれ違うように、もう一人の主人公、祥江（さちえ）が登場する。祥江は中学校の時から「親友のつもりだった」（180頁）晃代（あきよ）との交際に悩んでいる。晃代は大学時代からの恋人と結婚したが、家事育児という普通の主婦が会おう忙しさを愚痴として、祥江にメールで送ってくることを、祥江は疎ましく思っている。その気持ちは、祥江が職場の上司と一時の不倫を経験してからさらに強くなった。その想いを以て展望塔に登り、こぶしで手すりを打っていた時声をかけたのが

菊川である。菊川はその祥江の苛立つ思いに芸術的な魅力を感じ、もう少しその気持ちを募らせるのを期待して翌日の再会を約束する。

翌日、祥江は約束したからというのではない気持ちで展望塔に来ていた。菊川はその祥江の内に育った想いを「素敵に育った」(189頁)と表現し、撮影する。祥江は「心の中に根を張っていたもの」を「真紅の色」の広がりと感じ、そして、「その色を切り裂くように、閃光がひらめいた」と感じ、「自分の中の何かが根こそぎ奪われていく」という「快感のような痛み」を感じた。(190頁)これが菊川が祥江から想いを引き抜いた感触であり、そのことで結果的に祥江は救われる。

いつの間にか晁代の家近くに来ていた祥江は、子供を抱えて風邪を引いている晁代に代わってホットケーキミックスを、お金を立て替えて買いに行こうとしてショルダーを見て、中には財布も携帯もなく、金づちが入っていることに驚く。ホットケーキを作り、ふるまってから、祥江はこれまでの孤独なわだかまりが解けたことを感じる。

場面は、「扉守」でなじみの「セルベル」の店内。謎の解答めいた台詞が菊川の口から洩れる。「せっかくのきれいな気(エナジィ)を全部吸い取らずにやめるのって、ストレス溜まるんだから」(197頁)がそれである。そして、祥江から抜き取った想いについては「殺意」(198頁)とまで表現する。それは「放っておいたらこの町のバランスを崩しかねないほどの厄介な『想い』」(197頁)である。菊川はその殺意を抜き取り、それを表現した「まがまがしいほどに鮮やかな色」(198頁)の作品を芸術として喜ぶ。

さて、このストーリーには幾つかの重要な概念が散りばめてあるが、その中心はタイトルの「写家」である。その「写家」の考察を軸に作者の意識的無意識的な意図を考えてみたい。

2. 「写真」と「写想」

「芸術家」菊川は、対象者の「想い」をカメラで抜き取って映像として表現する力を持っている。それは祥江のエピソードからも分かる様に、菊川の手加減の具合によって変えられるもので、いわば菊川の能力である。

しかし、いみじくも「写真」という言葉を「写想」と置き換えた作者の意図は一方で「写真」という言葉の本質を突いていると言える。

手元の『写真大事典』(三木淳他監修、講談社、昭和59年)によると、「写真」の語源は「英語のフォトグラフィー(Photography)の翻訳」だとされ「大槻磐水(1743~1813)が1788年(天明8)に門人に筆記させた《蘭説弁惑》の巻の下《磐水夜話》に〈写真鏡杆図〉として、カメラオブスクラを説明しているのが、いわゆる写真術に関して使われた最初」(842頁)とされている。また、「フォトグラフィーという語は、ハーシェルが1839年に著した論文で使ったのが最初」(842頁)とされており、「写真」という日本語よりは新しい。では、「カメラオブスクラ」とは何か、といえば、「写真術の発明以前にスケッチ用に用いられた

装置」(675頁)とされ、現在では一般に「凸レンズ(または針穴)とピントグラスを備えた、持ち運び可能な暗箱」(675頁)と考えられている。要するに「カメラ」であるが、「もともとはラテン語で<暗い部屋>を意味し、その壁あるいは窓のシャッターの小さな穴を通して、外部のイメージをその反対の内壁または白いスクリーンにその逆像として映す部屋」(675頁)であったとされる。

その原理は前4世紀のアリストテレスでさえ、「日食の日に、ざるの目やプラタナスの重なり合う葉の小さなすき間を通ってくる光が、地面に、欠けた太陽を映し出していることに気づき、その穴が小さければ小さいほど地面の上の像はシャープになることを発見した」(675頁)とされている。

では「フォトグラフィー」というと、それは「ギリシア語の光を意味するフォトと、描くことを意味するグラフィアとの合成語」(842頁)で、「光画」(842頁)と訳されたこともあるとされる。

さて、このような物理的な事情を知れば知るほど「写真」という語の奥行が見える。すなわち、「真」を写すものである。

それは対象の本質を写すという含みさえある。単なる物理的な「光画」という言葉が定着せず、あえて「写真」となったのは、写真が対象の真の姿、本質を写し取るものだという理解があったからに他ならない。

そして、「写想家」もまた、その延長線上にある。

ストーリーでも確認してきたように、菊川は対象の真の思いを読み取ることができ、それを抜き取って表現することができる。そこに「写真」と「写想」との接点がある。

しかし、これを一歩進めて考えてみると、ひとは果たして「真実」や「真なる想い」を知ることが出来るのだろうか、という問いに至る。

もちろん作者は、そこは小説の仮構として、当然できるという前提で述べている。しかし同時にそこには、誰にでもできることではない、という含みも垣間見える。菊川という人物の設定である。バイセクシャルで酔っぱらいからも絡まれる人物は少数派である。作者の自覚では、ちょっと変わったパーソナリティを置いてみようか、程度の気持ちかもしれないが、無意識的にマイノリティ、しかも弱弱しく見えるマイノリティを設定したのは、対象の本質把握にふさわしい人格だということの意味する。

まず、弱弱しく見える人物にはひとは油断する。油断して防衛を解き本質をさらけ出す。

このような意味で弱弱しさは有効な手段でもあるが、マイノリティの持つ、その能力は多くには備わっていないことを示唆している。

このように、小説では、マジョリティとしての一般人が対象の本質を読み取ることの困難さを示唆し、その能力をひとりの特異なフォトグラファーに託して、ひとりの女性を救うことへと繋いでいる。

では、このようなことは一般の人格では全く不可能なのだろうか。

問題は認識論へと移行していく。

3. 真実の認識

本質的な真なる想いを認識できるのか、ということと、想いとは真に現実的なものなのかということは、同じ問題の表裏である。

すなわち、ごく一般的に考えても、物事の本質を認識するのは至難の業である。と同時にわれわれの想いは、所詮思い空想しているだけであって、現実とは程遠いのではないかととも言える。

いずれにせよ、我々の想いの不確かさの問題である。

この小説ではそれは祥江と晃代との相互認識のずれとして表現され、それがすんでのところ悲劇を生みかねないところまでいったのだった。

その起こるべき悲劇を祥江の想いに読み取って、未然に防いだのが菊川だった。

では、菊川の能力とは、何だったのだろうか。

それは、酔っぱらいのエピソードからも分かる様に、本質を直観する能力である。その本質を想いの映像として写し取る、その能力であるが、認識論的には、まずは本質を直観する能力が際立っていなければならない。それは、想いを現実と一致させる能力だといっても良い。我々は日ごろ、自分に見えていること、自分が思っていることを現実だと思う癖がある。しかし、実際には勘違いもあれば錯視もある。医学における幻影肢現象（ファントム・ペイン）に至っては、古代ギリシアから我々の認識の不確かさのモデルとして伝えられている。

では、このような菊川のような能力は一般的に可能なのだろうか。

それについては、哲学的認識論と存在論との交錯について整理して考えなければならないが、それについてふさわしい議論の一つがフッサール(E.Husserl)のそれである。

ここではその全体的構図が示された『現象学の理念』(E.Husserl “Die Idee der Phänomenologie” (1947), 2.AUFLAGE, Neudruck, 1973, MARTINUS NIJHOFF)に拠りつつ大枠的な構造を考察してみたい。

現象学的思索の入口は、「現象学的還元(Phänomenologische Reduktion)」と呼ばれる操作である。これは、「すべての超越論的措定の排除(Ausschluss aller transzendenten Setzungen)」と言われるように、我々が客観的だと思っているすべての事柄を、「ただ純粹現象だけが、還元された現象だけが、絶対的に与えられたもの(absolute Gegebenheit)」(Idee, s.7)とされるように、結局はすべて主観に生じているものだという事実置き換えるという操作である。(Idee, s.5)

しかし、このままでは我々は永遠に真なるもの、本質的なものを把握することは出来ないことになるが、しかし、現実には個々の認識がばらばらではないように、すなわち、相互に通じ合えるように、我々にはなにか客観的な認識が与えられているように感じられる。それは「イデー化的抽象(die ideierende Abstraktion)」(Idee, s.8)と呼ばれる事実である。我々は個々にはそれぞれに固有の認識をしているが、通じ合える時に対象の本質理解をしているという事実である。それは、何らかの客観的な事実が我々に与えられている、

ということ、すなわち「コギタチオ(意識に思われている事柄＝筆者注)の『実在(Existenz)』は、絶対的自己所与性によって、すなわち、純粹に明証的なその所与性によって(durch ihre absolute Selbstgegebenheit, durch ihre Gegebenheit in reiner Evidenz)保証されている」(Idee, s.8)とされる。

このような「絶対的所与性(absolute Gegebenheit)」が、新しい意味での「本質客観性(die Wesensobjektivität)」を与えることになる。(Idee, s.8)

このように、存在の客観的認識に対して可能性の道はあるが、しかし、かといってすべてのひとが平等に共通の本質的認識をしているわけではないことも事実である。むしろそれだからこそ我々は研究活動を遂行しなければならないのである。

ここでまず入口として考えられるのが「直観(Scauen)」である。事実は本来明証的に現れているはずだからそれを単に直観すればよいということになる。(Idee, s.11-12)

その明証性のうえでさらに遂行されるべきが、研究である。「論理学研究」などのフッサールの他の業績をみても明らかのように、それは、論理を駆使して思考を重ねて行かねばならないことを意味している。実際にはその作業は人類が普通に行っている仕事と変わらないが、しかし、本質の明証性を信じ、直観を磨きつつ論理的に組み立てる作業はいわば永遠に続くことになる。その際、方向性に誤りは生じないのだろうか。

ここで、フッサールは明証的所与性を強化するために「指向性(Intentionarität)」の概念を導入する。これは「これは認識体験の本質に属することだが、認識体験、それはある指向(eine intentio)を持ち、何かを思念し、それぞれの仕方である対象性に関係しているものである。」(Idee, s.55)とされるように、われわれが何かを認識するとすれば、それはその「なにか」という本質的な姿を持ったものが我々の認識が指し示すという形で現れるべく唯一絶対無限なる世界存在全体が構成した、というものである。

論理的研究の可能性もこの指向性あつてのことなのとは言うまでもない。

さて、このような認識論的構図に置き換えてみると、菊川の能力はこの指向的な意味において際立っていると見える。一般には困難だからこそ、研究や論理的考察に向かうのが筋道だというフッサールの指摘から考えれば、彼は明らかに一般人ではない。また、小説ではさらに対象の本質から自在にその本質的意味を抜き取ることまで描かれるが、そこまでのリアルな事実は、一般には現実的ではないとしても、写真や絵画などの表現が対象の本質的なものを抜き出して、独り歩きし、それが逆に対象認識を変えてしまうことは常に指摘されることである。

菊川と了齋の関わりはその意味で重要である。この小説集全体の狂言回しとしての了齋は、ユーモラスに描かれてはいるが、全体の倫理的基準を担っている。その了齋との軽妙な駆け引きの表現によって、菊川が何ものかが示される。当初筆者は了齋によって菊川が正義と常識を磨いていくように読んだが、了齋のすべてわかっているにもかかわらず、菊川を自由にさせる態度(178-179頁)からはそこまでの積極的な意図を感じる事が出来ないというジレンマもあった。これはセルベルの店主に対しても同様だった。そこで頂いた作者自身のコメント(2015.9.22Email)が一気にこの問題を解決してくださった。コメン

トはこの作品集『扉守』全体を解説するのも重要な意味を持つので、一部引用させていただきます。

「菊川自身が、「扉守」作中ではセルベルマスターと並ぶくらい人間離れした存在で（たとえば行雲やサクヤたちは、普通の人間でありながら卓越した芸術的能力によって超人的な存在になっているとも考えられますが、菊川はおそらく人間とは別種の存在です。昔話などでもおなじみの、「人間の精気を自らの養分として生きる」物の怪に近いのだと思います。そのため人間の精気（エナジイ）の内容を読み取ったり吸い取ったりできるということです。」

「菊川はおそらく、人間の正義や常識には関心を抱いていません。一步間違えば彼は、人間の天敵と言っていい存在になるのですが、幸いなことに「美意識」というか、「何を美しいと思うか」が人間とかなり共通しているので、人間の持つ「情」というものも理解することができ、自分が気に入った部分については守ってやろうとします。ですから、祥江を救うことになったのも、たまたま結果的にそうなった、というのが一番近いと思います。」

「了齋やセルベルマスターは菊川のそういうところを理解しており、そこが潮ノ道にとって役立つ限りにおいて、彼を潮ノ道に受け入れるけれど、そこを逸脱するようならいつでも彼を締め出すであろうと思います。」

余談だが作者のこのようなコメントが作品研究においてどんなに貴重かは、文学研究者には骨身に染みる場所である。直接資料的にも残しておかねばならない価値があるものとして、掲載させていただいた。

そして、このような菊川の優れた本質直観能力と直観したことをもとに実行に移せる能力とによって、この小説のクライマックス、祥江への救済へと向かうのである。

このように、菊川の能力は際立っているとしても、この小説を描く作者自身の、人を救い、人格発達させたいとする傾向性に包まれていることが心地よいし、翻って、菊川は単に特殊なものではなく、フッサーも指摘するように我々もまた磨けば、少し迂遠な形で、そのような能力を発揮することができることと示唆されていることに気づく。教育、治療などがその延長線上に成立する人類の重要な文化であることは言うまでもない。その意味で「想い」は単なる抽象的主観的な思いではなく、現実性への方向を指示する客観的な想いだと言える。

4. 今後に向けて ~場所の問題

この小説を解説するとまたも我々の生き方の問題へと辿りつく。

それは、一方では登場人物たちの生き生きした演技力に喚起されているが、他方で、作者が丹念に描く、背景としての場所を忘れてはならないことを含む。

尾道市の最も特徴的な尾道水道を見下ろす千光寺山の山頂付近、展望塔の描写はまさにそのままである。天空に突きだして、そこから見下ろす尾道水道を見つめつつ、ひとはさ

まざまな感慨にふける。単に「美しい」とばかり言えないある種の緊張が走る。そこに立てば、その緊張こそがこの小説のプロットになったと強く感じる。

重要な問題はこの緊張である。

それは、映像的場所としては高いところ、という緊張かもしれないが、それによって比喩的に暗示されているのは、生きていく上での緊張、すなわち、個と普遍との間で双方に引かれあう実存的緊張である。

研究はもちろんだが、我々が問題を解決し、より成長していくためにはこの実存的緊張から逃げないことが重要であろう。祥江が翌日、悩みと決意を持ってこの展望塔に上がる時、読者は一抹の不安と、そこに菊川がいることへの奇妙な安堵感とに包まれる。そして、海の風景は高さの恐怖を忘れさせるほどの受容的な姿をしている。老夫婦のエピソードと比較すれば、この双方は、人によって捉え方が異なるのである。と、同時に個と普遍との対立の緊張は、時、所を変えても我々に必要なものである。個々人はそれぞれにその緊張のもとで複雑に対応し進化しつつ、充実した生きざまを求めて生きていかねばならないのであろう。

このように、この作品もまた大切な言葉を伝えてくれた。英邁な作者に感謝し、小論について資料としても貴重な、ご丁寧なコメントをお寄せいただいたことに心からの御礼を申し上げます。

引用文献：

光原百合『扉守 潮ノ道の旅人』文藝春秋、文春文庫、2012年

三木淳他監修『写真大事典』講談社、昭和59年

E.Husserl “*Die Idee der Phänomenologie*” (1947), 2.AUFLAGE, Neudruck, 1973,

MARTINUS NIJHOFF (参考：邦訳は立松博孝訳・E.フッサール『現象学の理念』みすず書房、初版昭和40年)

なお、本稿は以下の企画で公開発表・討論したものをもとに改定したものである。

※尾道市立大学地域総合センターによるインフォメーション

尾道市立大学芸術文化学部日本文学科光原研究室では、尾道学研究会・総合文化学会との共催により「哲学／文学セッション【尾道という「場所論」と「場の力」～光原百合作『扉守』から～パートV】」と題した公開講演会を次のとおり開催します。

本学教授・光原百合の作品集『扉守』（株式会社文藝春秋）の各短編を解説するシリーズも第5回目となり、今回は「写想家」を取り上げます。

内 容 :

1. 荒木正見講演 『光原百合「写想家」における「想い」の現実性』

作品では、カメラという道具が写真家の腕(?)によって、対象が想っていることを抜き取るというファンタジーが描かれますが、たしかに私たちが普段思っていることはどれほどの存在的現実性があるのか、は大きな課題です。作品のテーマの枠組みから哲学的にも重要なテーマへと拓いてみたいと思います。

2. 両講師による「写想家」についての対談

日 時 : 平成 27 年 9 月 27 日 (日) 18 : 30 ~ 20 : 00

場 所 : 尾道市立大学サテライトスタジオ 1F (入場無料、事前申込必要)

講 師 : 荒木正見 (九州大学哲学会会長・尾道学研究会顧問・哲学、心理学)
光原百合 (尾道市立大学芸術文化学部日本文学科教授・文芸創作)

申 込 : 尾道市立大学地域総合センター (電話 0848-22-8311 【代表】)

共 催 : 尾道学研究会、総合文化学会

後 援 : 山陽日日新聞社

[Reality of Feeling on the Novel "Shasouka" by MITSUHARA, Yuri]

[ARAKI, Masami・総合文化学会・哲学・心理学・比較思想]